

2009年10月4日

## iPS細胞、不整脈患者から作製へ

### <国立循環器病センターなど最適な治療法を探る>

国立循環器病センターは慶応大や京都大などと協力して、重症の不整脈患者から採った細胞を使い、新型万能細胞(iPS細胞)を作る研究に乗り出す。心臓の細胞に成長させて特徴などを詳しく調べ、患者ごとに最適な治療法の開発に役立てる。

同センターの倫理委員会が3日までに研究計画を承認した。研究期間は5年。心拍が突然乱れて不整脈を起こし死に至ることもある「先天性QT延長症候群」や「ブルガダ症候群」の約10人の患者から皮膚を提供してもらい、慶大でiPS細胞を作る。

遺伝子の変異が病気の原因となっているケースもあるが、変異のタイプによって重症度などが違うため、iPS細胞によって最も効果的な治療法を探る。

難病患者の細胞からiPS細胞を作る研究は京大や慶大などで進んでおり、筋委縮性側索硬化症(ALS)やパーキンソン病、統合失調症などの患者からiPS細胞を作製している。

＝日本経済新聞＝